第４章　まとめ

Ⅰ　潤番田遺跡出土象嵌青磁方枕について

１　象嵌青磁方枕について

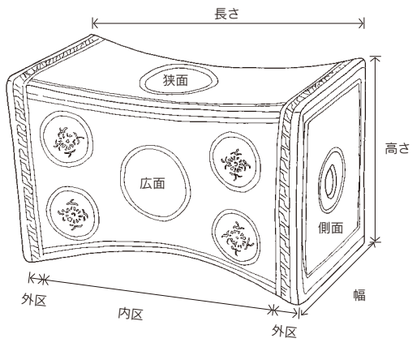
高麗青磁とは青灰色の胎土に鉄分を含んだ釉をかけて焼き締められたものである。国内では11世紀後半から12世紀前半にかけて出現し始める。一般的に高麗青磁として想起される象嵌青磁は12世紀後半からみられるが、この時期、博多から出土する象嵌青磁は激減し、京都や鎌倉で梅瓶などの優品の出土量が増加する。博多で再び出土量が増加するのは、14世紀後半に入ってからである。その後の朝鮮王朝陶磁になるとさらに増加していき、15世紀から16世紀の遺構や包含層からは数多く出土している（佐藤2008）。このように象嵌を施す青磁は高麗～朝鮮王朝期にかけて数多く製作されていることから、本稿では一括して象嵌青磁と称する。

以上のような出土傾向をもつ象嵌青磁であるが、方枕の出土例は非常に限られていることが高正龍氏によって指摘されている（高1996）。なお、方枕の各部名称は高氏に従う。方枕の前後面を広面、上下面を狭面とし、その両面の総称として主面を用い、側面と区別する。側面の平面は長方形であることが多く、長辺を高さ、短辺を幅と表記する。広面・狭面・側面はそれぞれ２面ずつあり、同じ紋様を施すことが一般的である。紋様の表現には内区・外区を用い、円圏内の紋様を主紋様という（高1996）。これらをまとめたものが第109図である。

なお、日本で出土する方枕は細片の場合が多く、湾曲の有無で主面と側面の区別は容易であるが、広面か狭面かの判断は難しいことが多い。

２　国内出土高麗青磁方枕との比較

象嵌青磁方枕は現在のところ中国・韓国・日本で確認されている（高1996）。このうち、韓国出土例は出土遺構や経緯が不明なものが多かったが、近年の開発に伴う発掘調査の増加に伴い、伏龍洞遺跡など遺跡から出土する例も散見され、遺構や時期も確認できる資料も出てきている（嶺南文化財研究院2008）。一方、日本出土例は大半が発掘調査に伴うものである。国内で確認されている方枕は表1に示している。この表は高正龍氏と降矢哲男氏の集成（高1996、降矢2002）を元にその後の事例を追加したものであるが、現在のところ、遺跡出土品は13例に限られる。表にはこれに加え、出土品ではないものの新安沈没船引揚品と大徳寺伝世品を加えている。



第109図　象嵌青磁方枕各部名称

以下、日本出土例を西から順にみていく。

・潤番田遺跡出土例（福岡県糸島市）（第110・111図１）

本書で報告したものである。潤番田遺跡からは7片の方枕片が出土しており、7号井戸、34号・35号土坑、包含層からバラバラに出土した。これらは互いに接合しないが、器壁の厚さや釉薬の色、象嵌で表現された紋様などから、おそらく１個体分の陶枕片であると思われる。

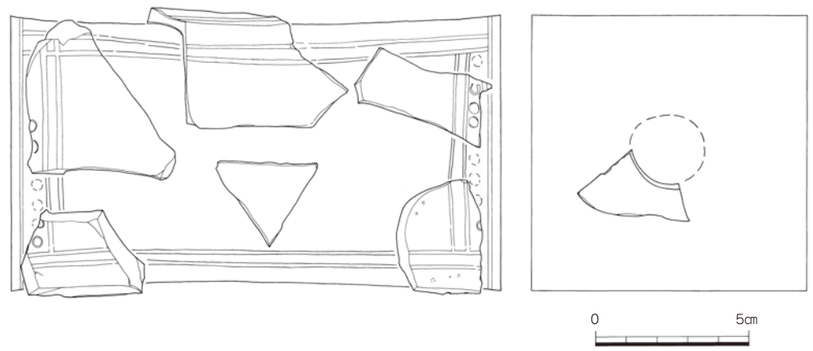
個々の破片については、各遺構の項で報告しているが、復元した図面に出土品を配置したものが第110図である。縦9.0㎝、横16.0㎝という大きさは、高麗美術館所蔵方枕を参考にしているが、この面が方枕の広面、狭面のどちらに該当するのか出土品だけでは判断できない。

模様の構成は側面から3.0㎜のところに界線を、主面屈曲部から5.0～7.0㎜の箇所に２重の界線を施す。その後、界線の内側に直径4.0㎜の珠文を並べる。この珠文はスタンプ文で、スタンプが浅かったせいか象嵌の線の幅が非常に狭いことが特徴である。珠文と珠文の間は1.5～2.0㎜ほどあり、ここから復元すると11個の珠文が配置されるが詳細は不明である。その後、珠文の内側に２重の界線が施され、先の２重界線にぶつかる。出土した破片を観察するかぎり、２重界線より内側には象嵌は認められず、施された象嵌も白象嵌のみの単色である。参考資料として新安沈没船引揚品の方枕と比較すると潤番田例が非常に装飾性に乏しいことがわかる。国内出土例を含めても方枕は基本的に装飾性が高いことが特徴であることから、本例の質素さが際立つ。

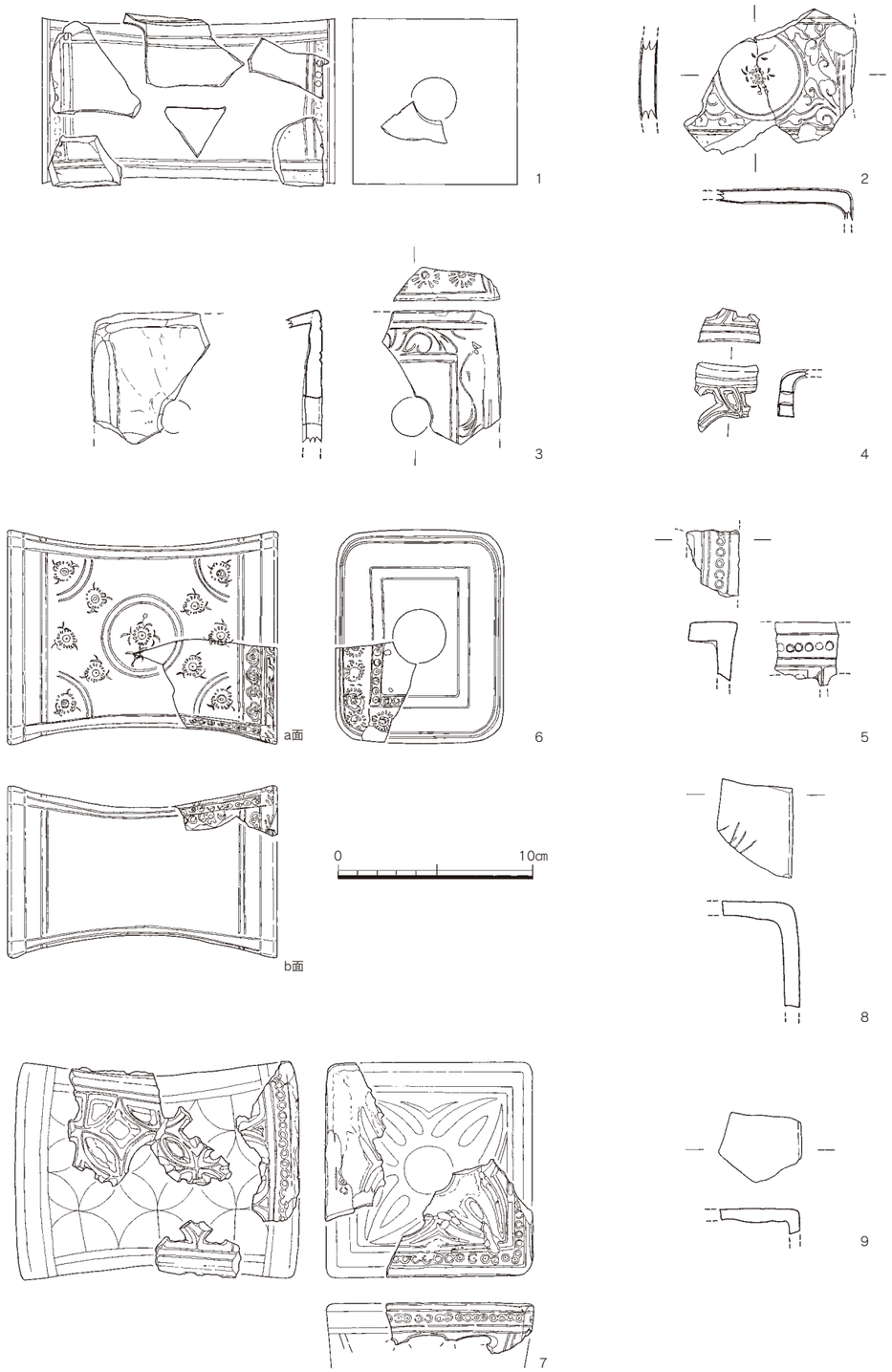
しかし、類例が少ないため製作時期の特定が難しい。方枕が出土した７号井戸の時期は瓦質擂鉢の出土などから15世紀代に位置付けられる。なお、方枕片の一部には欠継の痕跡が残っており、一度壊れた方枕を修復して用いていたことが確認されることなどから遺構と方枕そのものの時期は乖離すると思われる[註1)]。

・御笠川南条坊遺跡４次調査出土例（福岡県太宰府市）（第111図２）

御笠川南条坊遺跡は福岡市博多区東比恵１丁目から筑紫野市永岡に至る福岡南バイパス関連の調査が行われた遺跡で、古代から中世にかけての井戸と溝が確認されている（前川・新原編1976）。方枕は暗黒褐色粘質土（包含層）から出土するが、包含層という性格からか報告書では時期の記載はない。しかし、西谷正氏の論考では13世紀に位置づけられている（西谷1983）。方枕の残存部分は主面で、現存長8.7㎝、幅6.7㎝を残すが、復元すると長さ10.0㎝程度になる。主面の中央部分には直径4.7㎝の２重の円圏を置き、その中に菊花文を配する。菊花文の茎と葉を黒象嵌で表し、花を白象嵌で表現する。円圏から外区の界線までは逆象嵌の唐草文を充填する。広面と狭面が接する箇所は接続痕がみられず折り曲げである。また、屈曲部はほぼ直角であるが、丸みをもつ。灰白色の胎土に、青味を帯びた緑釉が厚くかかる。九州歴史資料館所蔵。



第110図　潤番田遺跡方枕実測図、想定復元図（1/2）



第111図　象嵌青磁方枕集成（1/3）

・**観世音寺120次調査出土例**（福岡県太宰府市）（第111図３）

観世音寺120次調査地点の灰茶色土層から出土した方枕の側面片である。中央部に透孔を施し、内側から外に向かって界線・唐草文・界線を配す。本来は象嵌が施されていたのであろうが、被熱のためか、釉は非常に薄く、象嵌も線刻状に残るのみである。また、外区には目跡を残す。主面側も若干残り、界線の内側にスタンプで菊花文を施す。側面と主面は鋭角に接合されるものの、屈曲部はやや丸みを帯びる。内面は主面が外れた痕跡が残る。また、釉が外面よりよく残る。現存長6.7cm、現存幅6.0cmを測る。九州歴史資料館所蔵。

・**観世音寺111次調査出土例**（福岡県太宰府市）（第111図４）

観世音寺の111次調査地点の黒色砂質土から出土した方枕の屈曲部小片である（岡寺編2010）。屈曲部は湾曲し、丸みをもつ。主面はいずれも透彫を施し、それに沿って白象嵌を配す。現存長3.15cm、幅3.45cmを測る。九州歴史資料館所蔵。

・**大内氏館跡13次調査出土例**（山口県山口市）（第111図５）

13次調査区１・２号竈で出土した方枕片である。主面の外区片で透彫にそって白象嵌を施す（北島編2010）。その他、2点の象嵌青磁方枕片が出土している[註2)]。

・**平安京左京四条三坊出土例**（京都府京都市）（第111図６）

1979年に実施された発掘調査で、室町時代の灰褐色泥土層から出土した。本資料は方枕の角部分の破片で、最大残存長7.5cm、厚さ0.7cm～1.3cmである。胎土は灰色で、釉の色は緑灰色～明緑灰色を呈し、貫入も認められる。本資料は３面ともそれぞれ異なる紋様をもち、広面と狭面の屈曲部が面取りされていることが特徴である。紋様は界線・弧線・雷文などはヘラ・コンパスを用いて描き、菊花文・珠文・如意頭文はスタンプ施文である。象嵌は白象嵌と黒象嵌である。ａ面は二重の弧線と菊花文を主文とする。側面と接する外区には外側から雷文帯・如意頭紋帯・界線を配し、ｂ面と接する外区（面取部分）には主文と界線を配する。ｂ面は残りが悪いため詳細は不明であるが、側面と接する外区はａ面と同じである。主文は珠文が確認されるのみである。側面は円形透かしを中心に配し、内側から珠文帯・菊花文帯・二重界線を配する（高1996）。

・**堺環濠都市遺跡出土例**（大阪府堺市）

未報告資料であるが、堺市堺区宿院町西１丁SKT214地点第５次整地層から方枕片が出土している。この層から斜め擂目をもつ備前焼の擂鉢が出土していることから、廃棄時期は16世紀第４四半期に位置づけられる。方枕の詳細は不明であるが、紋様は全て陰刻で表現されており、方枕そのものは古い段階に位置づけられる[註3)]。

・**一乗谷朝倉氏遺跡59次調査出土例**（福井県福井市）（第111図７）

方枕は５片に別れ出土し、全体の復元は難しいが報告書によると長さ20cm、側面11cm×11cmの正方形に復元し、側面の透孔の直径を2.5cm前後とする。主面は七宝繋紋を透彫し、その紋様に沿って白象嵌を施す。外区は珠文帯を廻らす。側面は円形透かしの周りに４枚の花弁を配し、透彫するもので、主面同様、紋様に沿って白象嵌を施す。外区は珠紋帯である。釉薬は厚めにかけられ、透明感のある青緑色を呈する。なお、実測図は高正龍氏の復元案である（高1996）。

・**若宮大路周辺遺跡群出土例**（神奈川県鎌倉市）（第111図８）

方枕の主面屈曲部片である。陰刻で紋様を表すが、写真ではうまく観察できず、どのような紋

様かはわからない。報告者の手塚直樹氏は枝状の文様が陰刻されているとするが、器面の傷の可能性も指摘する。内面の布目痕の存在から型造りを想定している（手塚1985）。遺構は柱穴・土坑・井戸・溝が確認され武家屋敷と推定されている。方枕は13世紀末～14世紀初頭の遺物と共伴している。

・千葉地遺跡出土例（神奈川県鎌倉市）（第111図９）

方枕の主面屈曲部で、内面に布目があることから型造りとされる。紋様は確認されない。この方枕は火を受け、釉が不透明な灰青色を呈する。時期は13世紀末頃に位置づけられる（手塚1985）。

・熊野堂大舘跡（宮城県名取市）

熊野堂大舘跡は中世の山城跡である。この遺跡の包含層より、方枕が出土していることが、降矢哲男氏の高麗青磁集成に記されている。時期は14世紀～15世紀後半に位置づけられている（降矢2002）。

このほかに出土品ではないが、新安沈没船から引き揚げられたものと、大徳寺に伝わるものがある。

・大徳寺伝世品（京都府京都市）

大徳寺は宗峰妙超が正中２（1325）年に創建した寺で、京都市北区に所在する。至徳３（1386）年には京都十刹の第九位に位置づけられた。享徳２（1453）年の火災と応仁の乱で伽藍が焼失したものの、すぐに復興し今日まで至る。方枕は伝世品として大徳寺に伝わっていたもので、現在は大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵されている。方枕は長さ21.7㎝、高さ10.6㎝、幅8.6㎝を測るもので、側面の片方を四角く削り取り、花生けとして用いられていたとされる。高正龍氏によると文様は広面の中央に円圏を配し、その中に双鶴文を描く。主面・側面の内区四隅には草花系の文様を配し、その外区に雲紋帯を廻らせている。文様はいずれも陰刻で表す。側面には４個の目跡が残る。製作時期は12世紀とされる（高1996）。

・新安沈没船引揚品（韓国全羅南道新安郡）

1323年頃に沈没した日本向けの船から出土した完形品の方枕である。この方枕は多くの中国陶磁に混じって出土した７点の象嵌青磁のうちの１点である。広面に中央部に円圏を置き、その中に２羽の雲鶴文を配す。外区に接する内区の四隅にもそれぞれ１羽の鶴文を配し、その間に雲気文を充填する。狭面と接する外区には二重の界線、側面と接する外区には内区側から蓮弁文帯・界線を置く。狭面は中央寄りの箇所に２つの円圏を置き、その中に菊花文を配す。円圏の外側は逆象嵌で唐草紋を描く。外区は広面と同じである。側面は中央に透孔を設けるがそれぞれ大きさが異なる。小さいほうの透孔をもつ側面に目跡を４つ残す。透孔の周りは逆象嵌で唐草文を充填し、外区は界線を廻らす。象嵌は白象嵌を主とするが、円圏や鶴や菊花文に黒象嵌を効果的に用いる。色調は淡緑色である。時期は12世紀後半とされる。韓国国立中央博物館に所蔵される。

NO	遺跡名	出土遺構	遺構の時期	性格	都道府県	市町村	タイプ	大きさ	出典	備考
1	潤番田遺跡	7号井戸	15c	城館	福岡県	糸島市	象嵌	小片	本報告	装飾少ない（界線＋珠文）。鈍角。角が鋭い
2	平安京左京四条三坊	室町時代包含層	13c後～14c中	都市	京都府	京都市	象嵌	7.5㎝	1	界線・圏線・雷文・菊花文・珠文・如意頭文
3	大徳寺	伝世品	12c	寺院	京都府	京都市	陰刻	21.7×10.6×8.6	2	完形品　花瓶に転用。東洋陶磁美術館蔵
4	新安沈没船引揚品	沈没船	14c前半か	―	全羅南道	新安郡	象嵌	15.9×11.7×9.2	3	1323年沈没。蓮弁文・円圏文・雲鶴文・菊花折枝文・逆象嵌。東福寺が発注。陶枕そのものは12世紀後半
5	御笠川南条坊遺跡4次	包含層	12c中～13c初	集落	福岡県	太宰府市	象嵌	8.8×6.7	4	菊花文・唐草文（逆象嵌）。時期は西谷論考
6	観世音寺僧坊地区	包含層	不明	寺院	福岡県	太宰府市	象嵌	6.7×6.0	5	唐草文、表面は風化
7	観世音寺111次	包含層	不明	城館	福岡県	太宰府市	象嵌	小片	6	小片のため、文様不明。透彫。
8	一乗谷朝倉氏遺跡59次	包含層	13c後～14c中	都市	福井県	福井市	象嵌	14.6	7	七宝繋文、珠文、透彫。
9	大内氏館跡13次	1・2号竈	不明	城館	山口県	山口市	象嵌	小片	8	圏線、透彫。
10	大内氏館跡	―	不明	城館	山口県	山口市	―	不明	8	
11	若宮大路周辺遺跡群	包含層	13c後～14c中	都市	神奈川県	鎌倉市	陰刻	小片	9	
12	熊野堂大舘跡	包含層	12c前～13c中	城館	宮城県	名取市	―	不明	10	
13	千葉地遺跡	包含層	13c末	城館・寺院	神奈川県	鎌倉市	―	小片	11	
14	堺環濠都市遺跡	包含層	16c末	都市	大阪府	堺市	陰刻	不明	―	

表1　日本出土　方枕出土地名表（伝世品・引揚品含）

【表1の出典】

1　京都市文化観光局編1980「平安京左京四条三坊跡」『平安京跡発掘調査概報　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』京都市観光局
2　大阪市立東洋陶磁美術館編1992『高麗青磁への誘い』
3　文化広報部文化財管理局1988『新安海底遺物（総合編）』
　香本不苦治1989「新安海底遺物の高麗青磁についてーその生産窯の推論と時代ー」『貿易陶磁研究』9
4　前川威洋・新原正典編1976『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』3　福岡県教育委員会
　西谷正1983「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要』28
5　石松・横田・赤司・吉村編1990『大宰府史跡平成元年発掘調査概報』九州歴史資料館
　岡寺良編2007『観世音寺』九州歴史資料館
6　岡寺良編2010『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ』九州歴史資料館
7　福井市教育委員会・朝倉氏遺跡資料館編1988『一乗谷朝倉市遺跡朝倉館連絡道路敷設に伴う発掘調査報告書』
8　北島大輔編2010『大内氏館跡Ⅺ』山口市埋蔵文化財調査報告第101集
9　手塚直樹1985「鎌倉出土の高麗青磁」『三上次男博士喜寿記念論文集』
　根津美術館1996『甦る鎌倉ー遺跡発掘の成果と伝世の名品』
10 降矢哲男2002「韓半島産陶磁器の流通ー高麗時代の青磁を中心にー」『貿易陶磁研究』22
11 手塚直樹1985「鎌倉出土の高麗青磁」『三上次男博士喜寿記念論文集』

３　象嵌青磁方枕出土遺跡の分類と出土傾向

以上のとおり、日本国内では11例の方枕が遺跡から出土し、伝世品１点、日本向けの貿易船からの引揚品が１点存在する。これらが出土する遺跡を検討すると①都市（京都・鎌倉・堺）、②寺院（観世音寺・大徳寺【伝世】）、③城館（大内氏館跡・一乗谷朝倉氏遺跡・熊野堂大舘跡）の大きく３種類に分類される。新安沈没船引揚品には東福寺と墨書された木簡も含まれており、この船が沈没することなく博多に到着していたらば、この方枕は寺院に収蔵されていた可能性もある。また、御笠川南条坊４次調査包含層出土品について一覧表では集落出土としているが、こ

ような傾向から本来は都市もしくは寺院に伝わっていた可能性が高い。このように個々の遺跡から出土する象嵌青磁方枕の出土遺跡を概観すると普通の中世集落から出土するものではないことがわかる。

しかし、東アジアに開かれた一大貿易都市で、文献資料からも対朝鮮貿易の玄関口であった博多遺跡からは出土していない[註4)]。これまでの調査における博多遺跡出土の高麗・朝鮮王朝陶磁器は日用雑器が主体で、茶陶などのいわゆる珍品は博多を介し、京都・鎌倉へ搬出されたことが想定されているが（小畑1993、森本・片山2000）、象嵌青磁方枕の分布を見てみると観世音寺出土例（２点）、御笠川南条坊４次調査例（１点）に潤番田遺跡例を加えると福岡県内出土例は計４点を数えることから、国内出土例の３割強を占めることとなり、優品・珍品の類がすべて京都・鎌倉に搬出されたわけではないことがわかる。

高正龍氏の研究によると方枕は装飾技法により、鉄彩白堆（11世紀後半）→陰刻（11世紀末～12世紀後半）→象嵌（12世紀中葉～13世紀）と変遷し、象嵌透彫は13世紀後半以降に該当するが（高1996）、国内出土の方枕は大徳寺伝世品と若宮大路周辺遺跡群出土例、堺環濠都市遺跡出土例を除き、象嵌青磁で、透彫をもつものが多いことから、13世紀後半以降15世紀にかけて日本に請来されたと思われる。

4　おわりに

潤番田遺跡では方枕のほかに約30点の象嵌青磁が出土している。しかし、陶磁器全体の出土量はパンケース１箱に限られることから、象嵌青磁が占める割合はかなり高いといえる。ちなみに象嵌青磁30点という量は、これまでに糸島市内で調査された中世遺跡の中では突出した量であり、付近で確認された遺構の状況から潤番田遺跡を含む潤遺跡群が多元性を特徴とする対朝鮮貿易のひとつの窓口になっていたことが想定される註５）。今回紹介した方枕も普通の集落から出土しないことから、この貿易に深く関与した人物の所持品であったと考えている。

なお、高麗（朝鮮）との関係をみるならば、『筑前國続風土記』にある記述が興味深い。潤番田遺跡が所在する潤村には大友氏の尊崇をうけた臨済宗の平等寺が存在し、境内は方一町あったという。文亀二（1502）年以前に朝鮮鐘が平等寺に寄進されたが註６）、天文二（1533）年の大友・大内両氏の合戦で山口に奪い去られ註７）、本圀寺に納められたのち、天文六（1537）年に大内義隆により再び平等寺に寄進されたとある。その後、天正十七（1589）年に小早川隆景により聖福寺に寄進され、今日まで伝えられている（現在は重要文化財に指定）。なお、この朝鮮鐘は刻銘によると、連年の兵革を憂い、安穏を祈って制作されたものであり、この兵革の時期は高麗顕宗即位後の10年間（1010～1019年）に該当する。

このように聖福寺蔵の朝鮮鐘が元をたどると潤村に所在した平等寺への寄進品であることは、潤遺跡群と高麗（朝鮮）との高い関連性を示すものといえ、潤番田遺跡における象嵌青磁の量の多さならびに方枕が出土する理由の一つともいえる。

以上のように、象嵌青磁方枕の国内出土傾向をふりかえりつつ、潤番田遺跡出土例の位置づけを行なった。しかし、潤遺跡の調査は今後も継続される予定であり、遺構の配置等、遺跡の全容が明らかにされた段階で、他の出土品と合わせて検討を改めて行いたい。（平尾和久）

【註】

1）九州歴史資料館小田和利・岡寺良氏御教示。

2）山口市教育委員会北島大輔氏御教示。

3）立命館大学高正龍氏御教示。

4）福岡市教育委員会大庭康時・田上勇一郎氏御教示。

5）もちろん日本における東アジアの玄関口と称される博多遺跡とは貿易の規模・体制ともに比較できないほど小さなものであると思われるが、糸島地域では比較的等閑視されていた分野であるため今後の調査の進展に期待される。

6）朝鮮半島を中心に製作された鐘を朝鮮鐘という。朝鮮鐘は上辺に動勢がある竜頭と旗挿を備え、鐘身部に華麗な装飾帯を巡らすものや、飛天像を陽鋳するものもある。高麗時代の鐘は新羅時代のものと比べ丈が低い。なお、聖福寺所蔵の朝鮮鐘は総高99.5㎝、鐘身高76.8㎝、口径61.3㎝で、撞座の周辺に舞踊の天女と奏楽の天人を表現する。

7）大友氏は弘安九（1286）年の弘安の役の恩賞として、幕府より怡土庄志摩方三百町惣地頭職を与えられたことで、糸島地域に進出する。その後、大友氏は志摩郡に郡代を置き（志摩郡代）、郡内の訴訟など当地の実務を行わせた。特に注目されるのは、1550年代以前、博多に駐在する博多代官は志摩郡代の指揮下にあったことである。そのため志摩郡代は博多津内の訴訟、朝鮮貿易、寺社の再興等をつかさどり、大友氏の命令を津内に伝達する役割も担っていた（堀本1997）。

今後の検討が必要であるが、このような性格をもつ大友氏の志摩郡代は潤番田遺跡出土の方枕の所有者の可能性があり、反対に象嵌青磁方枕が博多遺跡から出土しない所以かもしれない（今後、博多遺跡から出土しないとはいえないが）。なお、現段階では大友氏関連遺跡から象嵌青磁の方枕は出土していない。

8）本稿をまとめるにあたり、下記の方から御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

高正龍・小田和利・岡寺良・大庭康時・小田富士雄・武末純一・桃崎祐輔・安武憲史・藤島志孝・主税英徳・田上勇一郎・堀本一繁・高山英朗

【参考文献】

大阪市立東洋陶磁美術館編1992『高麗青磁への誘い』
石松好雄・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳編1990『大宰府史跡平成元年発掘調査概報』九州歴史資料館
岡寺　良編2007『観世音寺』九州歴史資料館
岡寺　良編2010『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ』九州歴史資料館
小畑弘己1993「博多における16世紀から17世紀初めの陶磁器組成ー博多第60次調査の成果からー」『博多研究会誌』2
北島大輔編2010『大内氏館跡ＸⅠ』山口市埋蔵文化財調査報告第101集
高　正龍1996「京都出土の高麗青磁象嵌方枕について」『研究紀要』2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所
片山まび2005「日本出土の「初期高麗」についてー北九州地区の出土資料を中心にー」『貿易陶磁研究』25
京都市文化観光局編1980「平安京左京四条三坊跡」『平安京跡発掘調査概報文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』
香本不苦治1989「新安海底遺物の高麗青磁についてーその生産窯の推論と時代ー」『貿易陶磁研究』9
佐藤一郎2008「朝鮮半島陶磁器」『中世都市博多を掘る』海鳥社
手塚直樹1985「鎌倉出土の高麗青磁」『三上次男博士喜寿記念論文集』
西谷　正1983「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要』28
根津美術館1996『甦る鎌倉ー遺跡発掘の成果と伝世の名品ー』
福井県教育委員会・朝倉氏遺跡資料館編1988『一乗谷朝倉氏遺跡朝倉館連絡道路敷設に伴う発掘調査報告書』
降矢哲男2000「遺跡出土の高麗青磁」『南島考古』19
降矢哲男2002「韓半島産陶磁器の流通ー高麗時代の青磁を中心にー」『貿易陶磁研究』22
文化広報部文化財管理局1988『新安海底遺物（総合編）』
堀本一繁1997「戦国期博多の防御施設についてー「房州堀」考ー」『福岡市博物館研究紀要』7
前川威洋・新原正典編1976『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』３　福岡県教育委員会
森田勉1985「北部九州出土の高麗陶磁器ー編年試案ー」『貿易陶磁研究』5
森本朝子・片山まび2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』8
山本信夫1985「九州地方出土の初期高麗青磁についてー大宰府出土品を中心としてー」『貿易陶磁研究』5
嶺南文化財研究院2008『尚州伏龍洞256番地遺跡Ⅰ～Ⅳ』嶺南文化財研究院学術調査報告第148冊